

いよいよ開館に向けて、第二ステップへ

事務局

静岡県の自然系博物館設立に関する具体的な事業としては、平成 13-14 年度に行われた自然学習・研究機能検討会の提言を受けて始められた、散逸が危惧される自然史資料の収集保存事業があります。この事業は、平成 15 年から 7 年間に渡り、当 NPO が委託を受けて実施してきました。その間、収集保管された資料は 30 万点余におよび、着実に貴重な資料が集まってきました。

今回、静岡県議会 2 月定例会において、民主党・ふじのくに県議団による代表質問で、「自然史資料を活用した新たな活動拠点の整備について」という質問に川勝県知事が答弁されました。2 月 17 日の県議会には、当 NPO の理事 4 人も傍聴し、知事の答弁について固唾を呑んで見守りました。その内容について概要をお知らせします。

質問要旨は、「本県の自然の価値を十分に知り、感謝する気持ちを育てていくことが、『住んでよし、訪れてよし』の理想郷を作り上げていくことに結びつくだけでなく、郷土の自然を大切に作る有徳の人材育成に結びつくと考えます。新総合計画基本計画においても、自然史資料を活用した新たな活動拠点の整備を検討しているが、どのような検討を行っていくのか、また、どのような拠点施設を想定しているのか伺う。」という内容でした。

それに対して、川勝知事の答弁は、「県民が本県の自然を身近に体験し、県議が言われるように『まるごと博物館』にすることが目的でございます。その素晴らしさに感動したり、生涯にわたり自然に関心を持って学べるようにすることは、自らが住んでいる地域を良く知り、愛し、そしてより良い生き方を学ぶために大切なのであります。そのことが『ふじのくに』に徳のある人材が生まれてくることにも通じていると存じます。」

「そのため、現在所有しております自然史資料につきましても、収集や保管するだけでなく、県民が直接見たり触れたりすることによって自然の魅力を実感したり、自ら自然について学べるように活用することが重要です。自然史



自然史資料を活用した新たな活動拠点の候補地にあげられた静岡南高校

資料を活用した新しい活動拠点につきましては、従前の博物館のように展示機能を主体としたものというよりも、いつでも誰でも、本県の自然についての知的探求心を満たし、そしてまた関心を感じ、それを通して身近に体感することのできる機能を備えた、研究活動、生涯学習などに役立つ拠点となるように検討しているところです。」

「活動拠点となる施設につきましては、厳しい財政状況、早期に供用できるのが望ましいということも考慮して、例えばでございますが、再編が予定されている県立静岡南高等学校の校舎なども、既存の公共施設の活用という観点で検討の余地があると存じます。」と、活動拠点について、具体的な候補地をあげて、実施に向けての積極的な発言がなされました。

さらに、静岡新聞報道記事によると「県地域政策課によると、再編後の静岡南高（静岡市駿河区）は最有力候補で、2014 年のオープンを目指す。施設規模や静岡大学と連携しやすい立地、すでに県民に知られた施設であることなどが理由」とありました。

思えば、平成 8 年、静岡県立自然史博物館設立推進協議会を立ち上げてから 14 年。NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワークに替わってから 7 年を経過し、やっと我々の運動が認められ、花開きそうです。この新拠点の整備については、我々も静岡県に協力して、よりよいものになるよう働きかけていきます。

池谷仙之先生お別れの会

三宅 隆



池谷先生の遺影



献花



記念品の展示



偲ぶ会の会場

平成 22 年 11 月 4 日に、逝去された当 NPO 池谷理事長は、生前、葬儀は身内だけで、その後、関係者で賑やかに送って欲しい旨、身近な方に話されていたようで、その御意思に沿って、12 月 26 日に JR 静岡駅前のホテルアソシア静岡で「池谷仙之先生お別れの会」が開催されました。

当日は、全国から、古生物や静岡大学関係者など、総勢 200 名を越す参加者があり、故人の幅広い交友関係が偲ばれました。

第一部では、静岡大学の和田秀樹教授による、病歴や亡くなるまでの経過報告、元千葉大学理学部教授の山口寿之氏によるお別れの言葉があり、その後全員で遺影に献花をしました。最後に、奥様の池谷千恵子様より、

お礼と、思い出話のご挨拶がありました。

その後第二部に移り、群馬県立自然史博物館長の長谷川善和氏による挨拶と献杯があり、続いて食事をしながら、和やかに会が進行して行きました。会場には、池谷先生が作られたツリーハウスの写真や手作りの机、テッシュ入れ、愛用のパイプなどが飾られ、総理大臣より贈られた、叙勲（従四位瑞宝中綬章）の勲章も飾られました。

食事の間には、友人や関係者の思い出話もあり、最後は長女の聖子さんによるお父さんの思い出話で締められました。

池谷先生を、送るのにふさわしい会であったと思います。

岐阜県博物館と名和昆虫館の見学報告

水野米利子



岐阜県博物館の標本室



名和昆虫館の展示室を見学

2月27日(日)岐阜県にある「岐阜県博物館」と「名和昆虫館」を見学しました。空は曇り、雨が心配されるような天気の中、13名の参加で、朝7時に静岡駅を出発しました。

車に揺られること、約3時間で最初の目的地の岐阜県博物館に到着しました。館内に入るとまず会議室へ案内され、教育普及担当の竹内宗近さんより地学が専門の西谷徹さん、植物が専門の千藤克彦さんをご紹介します。竹内さんによると岐阜県博物館には現在6万点程の標本があり、来年度には植物が6万点追加され12万点に増える予定だそうです。しかしながらその標本の数は整理・登録された物の数であり、登録されていないものは5万点以上占めるそうです。登録作業は、専門の学芸員の方が少ないので、ボランティアの方に作業を手伝っていただいているそうです。

お話を伺った後は標本室を見学させていただきました。最初に入った標本室には哺乳類、昆虫と植物の標本があり、ちょうど専門の方がボランティアで蝶の分類をしていらっしゃるところで、静岡昆虫同好会の方々は大変興味深げにお話を聞いていました。次に鳥類や魚類などの標本室へ案内していただき、最後に化石や鉱物の標本室を見学させていただきました。標本室には、お馴染みのアンモナイトの化石をはじめ、恐竜の足跡の化石など珍しい標本がありました。また、動物専門の説田健一さんに日本で

は一つしかないチャバラアカゲラの標本を見せて頂き、野鳥の会の方は感動している様子でした。その後各自で博物館の展示室を観覧し、昼食後次の博物館へ向かいました。

名和昆虫館では五代目、現館長の名和哲夫館長にギフチョウの名を世に広げた1代目のお話や博物館の歴史について説明を受けた後、館内を見学させていただきました。館内には目もくらむような色とりどりの蝶や甲虫から、見たことも無いような変わった形の昆虫が展示してあり、その展示方法もとても興味深い物でした。名和館長によると、館内の展示は“老若男女問わず誰でも楽しめる、興味が湧く”をコンセプトに、ただ単に珍しい昆虫や、昆虫の専門家しかわからない様なものは置かないようにしているそうです。また展示室の全照明は、標本の劣化を防ぐため、LEDを使用しているそうです。博物館の展示室を見学した後一行は資料室にて、展示物の作り方を教えて頂きました。

今回、私立、県立の二つの博物館を見学することにより両方の利点や欠点、人を集めさせるための工夫など、たくさん学べました。また、どの博物館も標本整理・登録は、大変な作業だということがわかりました。岐阜県博物館のように、自然学習資料センターに保管してある標本がきちんと陳列され、活用される日がとても楽しみです。

静岡県の自然の魅力を体感するための自然史資料の調査と展示事業

横山謙二



資料センターでの作業のようす

昨年の8月9日より、静岡県自然学習資料センターにて実施していました県の緊急雇用対策事業の「静岡県の自然の魅力を体感するための自然史資料の調査と展示事業」が3月10日に終了しました。この事業は、SBSメディアサービスからの民間提案により、静岡県自然学習資料センターで行われたものです。この事業の主な作業として、出前博物館を行うことと、既存の標本・資料を整理・活用した静岡県の自然と動植物に関する展示資料の作成がありました。事業内容の詳細は、会報30号の2ページをご参照ください。

まず、出前博物館ですが、3月までにアクトシティ浜松、ツインメッセ静岡、静岡科学館る・く・る、富士山こどもの国、COP10会場、藤枝エスペース、東海大学自然史博物館の計7会場で11回の出前博物館を行いました。富士山こどもの国などの会場では、作業に従事した人たちにより、展示の解説も行われました。各会場では多くの見学者に恵まれ、十分に資料センターの普及啓蒙の役割を果たせたと思います。

次に、標本・資料を整理・活用した展示資料の作成について、主に展示用標本の作製、収蔵標本の写真撮影と写真画像のデータベース化、自然学習資料センターのホームページ作成、展示パネルの作製を行いました。

展示用標本は、ドイツ型標本箱で約60箱

を作製しました。内容は、世界のカブトムシ、南米のチョウ、静岡県で採集された迷蝶、絶滅危惧種のチョウなどの昆虫標本が中心で、中には採集するところからはじめた淡水魚などのアクリル樹脂封入標本も作製しました。

収蔵標本の写真撮影は、植物・昆虫・貝類・化石・鉱物などの約3,800標本を撮影し、後述するホームページの作成や展示用として活用されました。また、写真画像のデータベース化の作業では、会報30号と31号で募集し自然に関するネガやポジなどの写真が約14,000枚ほど集められ、それらをスライドスキャナーで読み込みデジタル化しました。写真は、静岡県内のものから、日本・世界各地で撮影されたものまであり、植物・哺乳類・鳥類・昆虫・魚類・爬虫類・両生類などの様々な生物の生態写真のほか、地質・地形など幅広い分野の写真がありました。中には、撮影することが難しくなった静岡県内の希少生物の写真も多く含まれています。今後、これらの写真は、ミニ博物館や観察会の資料などに、活用していきたいと考えています。写真を提供してくださった方々に、御礼申し上げます。

自然学習資料センターのホームページ作成は、資料センターに収蔵されている標本を紹介するページが1,000ページほど作成できました。まだ、ホームページ上には、掲載していませんが、これから徐々に掲載され、ホームページを充実させていけるものと考えています。

その他の事業では展示パネルの作製や標本整理などを行い、予定していた業務はすべて完了しました。

本事業を実施するにあたり、経験者や技術に優れた方たちが作業に従事してくださったおかげで、業務を順調に完了することができ、予定以上の実績をあげることができました。従事して下さったみなさん、6ヶ月間たいへんおつかれさまでした。



富士山こどもの国で9/11～26に開催された出前博物館「富士山のできるまで」の展示作業。



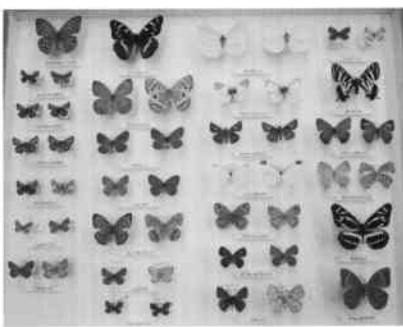
藤枝エスペースで11/2～30に開催された「富士山の生き物たち」の展示作業。



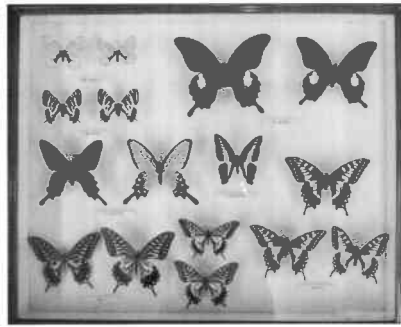
ツインメッセ静岡で10/9,10に開催された「貝のいろいろ展」で解説をする。



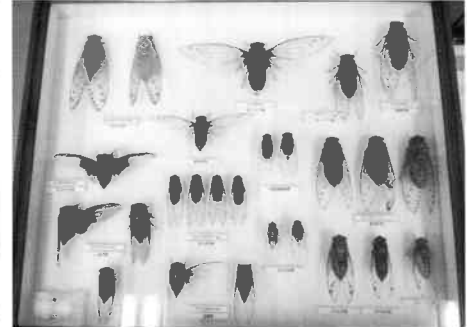
富士山こどもの国で10/2～31に開催された「富士山の生き物たち」で解説をする。



作製した展示用標本の「絶滅危惧種のチョウ」



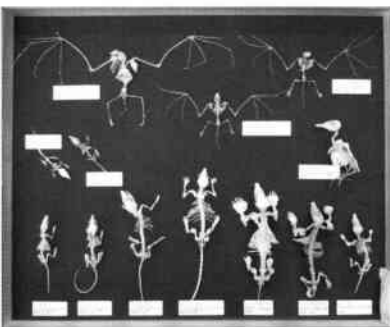
作製した展示用標本の「静岡県の蝶」



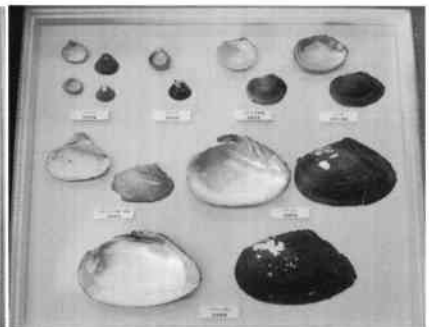
作製した展示用標本の世界のセミ



作製したアクリル樹脂封入標本「よそからきた魚 外来種」



作製した展示用標本の「静岡県の哺乳類骨格標本」



作製した展示用標本の「日本の淡水貝」

熱帯の島スラウェシは蝶の楽園

諏訪哲夫



スラウェシの農村風景

東南アジアの昆虫は美しく、多様性があるため実におもしろい。マレーシアの昆虫採集ツアーに、かの著名な、今はもう故人になってしまわれた九州大学の白水隆教授も同行するとあって、私が参加したのは1973年だったが、それ以来の久々の東南アジアであった。

以前からインドネシアのボルネオ島の東に位置するアルファベットの“K”の字型をしたスラウェシ(旧セレベス)には関心を持っていた。それは動物地理区の東洋区とオーストラリア区を分けるひとつの境界線である、バリ島とロンボク島の間を通り、ボルネオとスラウェシとの間のマカッサル海峡を北上するウォレス線に興味を引かれたからである。このウォレス線の東にあたるスラウェシと西に位置するボルネオやマレー半島とは蝶相が大きく異なる。シジミチョウ科とセセリチョウ科を除いてマレーシアやフィリピンなどの東洋熱帯全体は約930種(シジミ、セセリを加えれば約1700種?)が生息し、ボルネオには約330種、スラウェシには約240種とされている。ボルネオはマレー半島などとの共通種が多く固有種は9%と少ないが、スラウェシでは実に57%が固有種である。フィリピンの51%を凌いでいる。近隣の島嶼から古くから孤立していたため独自の進化を遂げたためである。また、理由は定かではないが同じグループの蝶どうしの大きさを比較するとスラウェシの個体は大きいというのもおもしろい。

昨年2010年12月中旬、静岡、札幌の友人と、福井県のハチの研究者2人、奈良、愛知の蝶の同好者と現地で合流し、西山保典氏の案内でスラウェシ島内を5日間採集した。西山氏はペンネーム兼愛称を“おしやまちょうたろー”といい、40年以上、虫・蝶一筋という人である。東南アジア各国に出かけること300回以上、年間の大半は外国暮らしだったという。個性ある筆致と手書きで虫の週刊誌を発行して35年余り、いまだに続けている鬼才の持ち主で、全国の虫屋で知らない人はいないという有名人である。スラウェシにも虫関係の多くの知人がいて、今回の我々のスラウェシ行きでもすべての世話をしてくれた。採集はスラウェシ島の中央部のパル周辺が主体である。13日、宿泊した島の南に位置するウジュンパンダンから中央部のパルへの便は夕方なので、午前中は車で1時間30分くらいのバンチムルンというところで採集した。ここは1800年代の終わりごろ、先のウォレスが発見したという東南アジア屈指の採集地といわれたところなのだが、今はジャングルの中の滝と川が美しいため観光地となっしまい、昔のすばらしい自然は無くなってしまったという。採集には向かないのでここから程近い小さな溪流沿いで採集した。山道に仕掛けたトラップ(小便をただけ)にさまざまな蝶が集まってくる。日本のアオスジアゲハにそっくりのミロンタイマイがよく来る。日本のアオスジよりもひとまわりほど大きく、青い帯はより青く鮮明で美しい。日本の九州南端部以南に生息し、東南アジアに広く分布するツマベニチョウもこう



ミロンタイマイの吸水



マダラチョウに擬態したアサギシロチョウの♀

いった湿ったところが好きで集まってくる。そのほかのシロチョウ、タテハチョウの仲間も混ざり合って熱帯ならではの光景となる。

夕方、パルに向けて飛び立った。1時間足らずのフライトである。インドネシアの離島しかも地方空港なのだから古いプロペラ飛行機でちょっと危険なのではという危惧を抱いていたが、どうしてどうして最新のジェット機である。夕食は海上レストランのようなところで海鮮料理を堪能した。但しイスラム教の国ということもあって酒類はビールだけである。



アオネアゲハの吸水

熱帯の地域も離島へ行くとすぐジャングルが広がっているかと思いがちなのだが、市街地は車、バイクがけたたましくクラクションを鳴らして疾走し、農村部に行けば水田や果樹農園やヤシ林が続いている。山に少し入っただけではかつて森林であったところも伐採後放置されたままであったり、あるいは二次林が再生している程度でなかなか自然豊かな熱帯雨林には行き着けない。幸い今回はすべてを知り尽くしている地元の案内人がついてるので誠に心強い。メインの道からはずれ、集落を抜け畑を通り、藪の中の悪路に難儀して進むと沢に出て、気がつけば森林はやっと熱帯雨林の様子となっていた。ここから沢に沿って歩きながら採集した。熱帯での採集は沢筋が最もよい。蝶は水を求めて集まってくるし、アゲハチョウの仲間は蝶道をつくって沢筋を往復している。沢の部分は森林に覆われず、日差しが地表まで届き、林縁は植物の種類も豊富で花も咲いているため昆虫が集まる。森林の中に入ってしまうと特殊な種類はいても個体数種類数とも激減し、ネットを振ることもできない。また危険でもある。最も目に付くチョウはマダラチョウの仲間である。ゆっくり飛んで花を訪れ、湿った地面に降り、人の汗にもひきつけられる。紫色で白い紋のあるマダラチョウがたくさんいてみな同じに見える。自宅に帰って図鑑をよく調べると3種であることが分かった。また別のマダラチョウにそっくりなシロチョウがいた。花に止まっているときも飛び方もマダラにまねている。我々もしっかり見ないとだまされる。毒のないチョウが毒のあるマダラチョウに似ることにより鳥の捕食から免れているベーツの擬態である。ほかにも熱帯ではこのような例がはかにもたくさんあって実に楽しい。

12月のスラウエシは雨期の地域もあるようだが、ここはそうではなく、採集した5日すべて天候には恵まれた。赤道直下南緯1度くらい、気温は日中で33℃位だろうか。冬の日本から突然この気温のなかで歩き回るのは厳しいが、湿度はそれほど高くなく、風通しの良い木陰に入れば快適であり、むしろ日本の夏の方が耐え難い。

5日間で120種くらいのチョウを観察、採集した。東南アジアのチョウの図鑑はシジミチョウとセセリチョウを除くとかなり詳しいものがあるのでほぼ同定できる。採集品は展翅を済ませ同定が終われば、近いうちに自然学習資料として県に寄贈したい。

駿河湾の深海魚 (3)

ミツクリエナガチョウチンアンコウ (その2)

久保田 正・佐藤 武

深海性魚類は、世界の海から少なくとも、2,000種以上が生息すると言われていています。このうち、チョウチンアンコウ類は、特徴のある姿から良く知られ、特に餌のとり方に興味が持たれています。多くの書物には釣り竿（イリシウム）を用いてそれを立てたり、曲げたりして小魚を誘うことが描かれています。この竿は、背びれの第一番目の棘が変化したものであり、口の上方に位置し、その先端には餌と間違えやすい特徴のある発光体（エスカ）がついています（図1）。

本種の釣り竿は、その根元が固定されずに出し入れが出来るようになっていています。背中側の正中線に沿って肉と表皮との間に溝があり、それが鞘状になっていて、その中を竿全体が前進後退できるようになっています。この竿を後退させると、基部は体の後半部にある背びれの前に3個の肉阜（にくふ）と呼ばれる肉質の突起の手前まで押し込まれ、竿の先の発光体の位置はちょうど口の真上に来ます（図2参照）。餌を引き寄せせるには、竿を立てたり、曲げたりしなくても伸ばしたまま後退させるだけで餌となる生物を口の上まで誘導させる構造になっているのです。

また、本種と同じ科に含まれる近縁種のピワアンコウについて尼岡（2009）は、彼の著書「深海魚」の中で、この竿を引き寄せると背中にある竿の後端を収納する鞘が後方へ突出することを紹介しています。しかし、これらのことはあまり知られていない知見です。

本種はどのような生物を餌として捕食しているのでしょうか。前報（その1）で紹介し

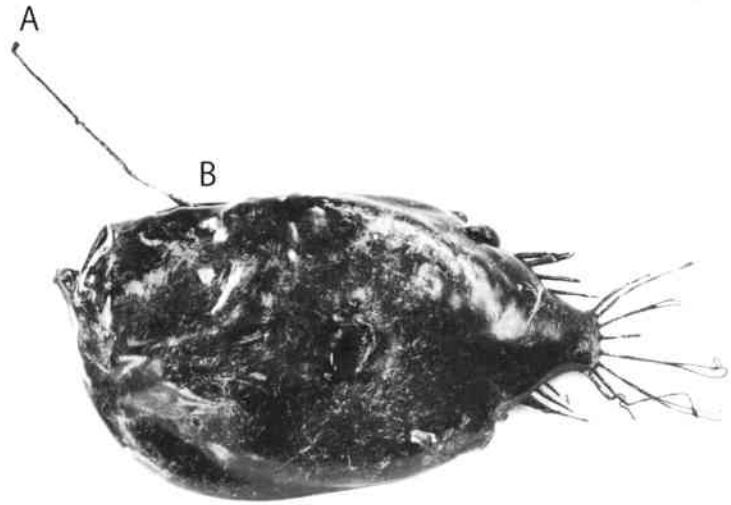


図1 釣り竿の先は口の前方向へ伸びている状態
1978年6月3日サクラエビ網混獲
体長 265mm

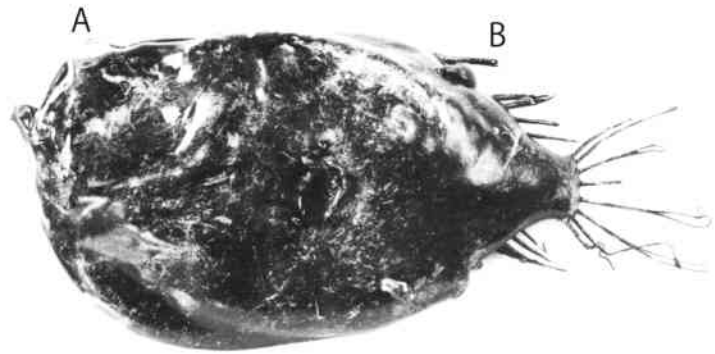


図2 釣り竿が格納された状態（図1と同じ個体）
AとBの位置に注目して下さい

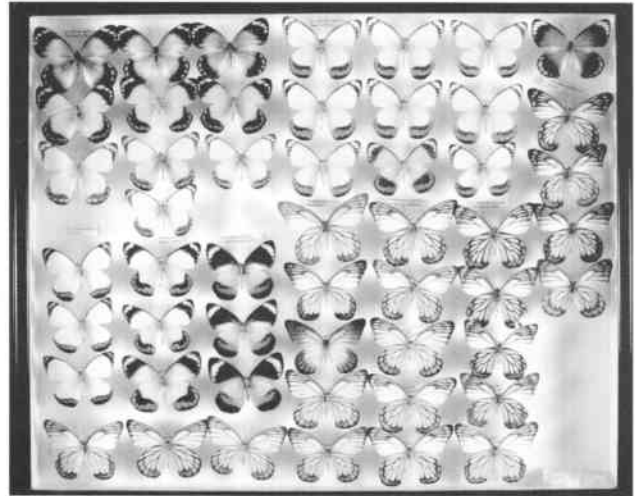
た図1の3個体について胃内容物を調べました。餌生物としては、小さい個体からそれぞれ順にセンハダカ（ハダカイワシ科魚類）を5個体；消化中の魚類を1個体；サクラエビを8個体とホソトンガリハダカ（ハダカイワシ科魚類）を1個体などを捕食しており、主に魚類と甲殻類のエビであることが明らかになりました。

コレクションの紹介
有馬速水氏チョウ類コレクション

鈴木英文



故有馬速水氏の標本室



デアラス属の標本

昨年10月25日に有馬速水氏のご遺族より、生前有馬氏が収集した大型のドイツ型標本箱400箱分約2万点にも及ぶチョウ類の標本が県自然学習資料センターに寄贈されました。有馬氏は東京都世田谷区にお住まいの小児科のお医者様で、そのコレクションは日本から東南アジア、オーストラリア、アフリカまで及び、主に東洋区からオーストラリア区にかけてのトリバネアゲハ、キシタアゲハを始めとするアゲハチョウ類、デアラス属を中心とするシロチョウ類が充実しております。トリバネアゲハ類では全種類、デアラス属では現在知られている219種のうち191種が集められており、国内でも第一級のコレクションといっても良いものです。

トリバネアゲハは鳥翅蝶とも呼ばれ鳥のような大きな翅を持つことから名づけられ、19世紀、欧米人の採集家によって散弾銃で撃ち落とされた個体も少なからずあったようです。これは鳥と間違えられたわけではなく、高い梢の上を飛ぶため、ネットが届かなく、仕方なしに撃ち落とされたものでした。デアラス属はカザリシロチョウとも言われ、後翅裏面に赤や黄色の派手な斑紋を持ち、幼虫はやドリギを食べて育つシロチョウ科の中では最大の

グループです。そのほかではタテハチョウ科のフタオチョウ類やマネシヒカゲ属などの標本も充実しております。現在標本を整理中ですので、整理が終わりましたらなるべく早い機会にミニ博物館などで皆様に公開していきたいと思っております。

氏がチョウのコレクションを始めたきっかけというのは、ご息子が小学校の頃、夏休みの昆虫採集に同行して虫を採り、その面白さにはまってしまったのだそうです。ご本人はミイラ取りがミイラになったとおっしゃっておられたとのこと。氏を良く知る方の話によりますと、氏は1922年2月2日生まれ、2が4つ続くことから2の数字が大好きで、いつもトップをねらわず、2番になるように心がけるも、いつも2番になれないと舌を出すような、にくめないおじさんだったと言います。タバコとお酒が大好きで、お酒を飲まなかったのはニューギニアへ採集に行ったとき、西イリアンのワメナで飛行機に乗れず、お酒を切らした（お酒を売っていなかった）1日だけだったそうです。

元気であれば、まだまだご研究に励まれたことでしょう。氏のご冥福をお祈りいたします。

出前博物館報告（5）

る・く・る 「ジュラ紀の地球展」と「静岡の化石展」

横山謙二



「ジュラ紀の地球展」に展示した直径1mをこすアンモナイト化石



「静岡の化石展」を見学する来館者

2011年1月8日から2月13日にかけて開催された、静岡科学館る・く・るの企画展「アロサウルスが見た世界 ジュラ紀の地球展」に、NPO自然博ネットおよび自然学習資料センターも展示協力を行いました。また、この企画展に合わせ10階のガレージでは、出前博物館として「静岡の化石展」を行いました。

協力内容は、「ジュラ紀の地球展」ではアンモナイトなどの化石標本の展示と解説文の提供をしました。また、開催期間中の土日休日は、資料センターの宮澤市郎氏により、化石のクリーニング作業の実演を行いました。また、土曜の午後は、筆者の横山が化石標本の解説しました。「静岡の化石展」では、主な静岡県の化石産地の紹介や静岡県で今まで発見された化石などを展示しました。

「ジュラ紀の地球展」開催期間中は、たくさんの人たちが見学に来ていました。見学者の多くは、小学生以下の子供たちが中心で、会場内を駆けまわりながら、いろいろな体験コーナーを楽しんでいました。中でもアロサウルスの骨格標本の前に設置してある、デジタル塗り絵コーナーでは、常に子供たちが熱心に塗り絵をしていました。その反面、提供した実物の化石標本を熱心に見学する子供は

少なく、標本の横にある復元された恐竜のフィギュアの方が人気があったようです。それでも、宮澤氏のクリーニング作業の実演コーナーは、好評で、いつも多くの子供たちが、実演コーナーを囲んで見ていました。また、宮澤さんが北海道夕張で採集した直径1mをこすアンモナイト化石は大人でも、その大きさに驚いて見ていかれる方が多くいました。また、見学者からは「静岡県でもアンモナイトは採れますか?」、「近くで化石が採集できる場所はどこかありますか?」、「近くで化石標本を見れる場所はどこかありますか?」などの質問が多くあり、見学者のなかには、化石や自然史に関する地域情報に興味のある方が多く来ていたようです。今回は、幸い10階「静岡の化石展」の展示物で、これらの質問に対応することができましたが、自然史に関する最新の地域情報を常に公開し、知りたい、見たい、調べたいという人たちが学習できる博物館のような施設の必要性を感じました。

今回のる・く・るに展示した標本やパネルはいずれ、自然学習資料センターで行うミニ博物館や常設展示場で活用したいと考えています。

出前博物館報告（6） る・く・る 希少生物展

横山謙二



るくるで開催の出前博物館「希少生物展」



「希少生物展」の展示

2月18日から3月11日にかけて、静岡市科学館る・く・る10階のガレージにて、出前博物館「希少生物展」を開催しました。る・く・るで出前博物館を行うのは、これで5回目となります。

展示は、静岡県内では、ほとんど生息が見られなくなった生物や、県内のごく一部の地域にしか生息していないなど、めったに見ることができない哺乳類、鳥類、植物、爬虫類、淡水魚

類など幅広い生物相の写真をそろえました。展示標本は、絶滅危惧種なので少ないですが、あまり見ることのできないコウモリの標本や絶滅のおそれのあるチョウ類の標本と、アカウミガメの骨格標本を展示しました。

今回の展示をとおして、開発ともなう環境変化や環境汚染などにより、生息場所を失い、絶滅おそれのある動植物の現状を、子供たちに理解してもらいたいと考えました。

出前博物館報告（7） 東海大学自然史博物館 富士山の自然展

横山謙二



東海大学自然史博物館の富士山展

昨年8月に自然学習資料センターから始まった「富士山展」は、静岡科学館る・く・る、こどもの国、藤枝エスペースで開催後、1月1日から東海大学自然史博物館にて最後の「富士山展」が開催されています。まだ、富士山展を見学していない方や、常設展示の見学のついでに、もう一度富士山展で見たいものがあると思う方は、ぜひ東海大学自然史博物館に足をお運びください。

展示期間は、2011年1月1日（土・祝）～4月4日（火）まで、開館時間は9：00～17：00です。詳細は東海大学自然史博物館のホームページをご参照ください。